

伝える

「ジャパネットの『顔』名調子見納め」と題した記事を見つけたのは、2016年1月16日付けの朝日新聞朝刊だった。創業社長高田明氏の名調子を知らない人はいないと思う。カシオプロトレック販促のお手伝いで、佐世保市の本社スタジオにお邪魔したことがある。そのとき、高田社長にもお目にかかった。1月15日、最後のレギュラー番組で「本日でスタジオ出演をやめます。長いことお世話になりました」とあいさつされた高田社長は、記者会見で「やり残しは在りません」と晴れやかな表情を見せ、「商品の良さが伝わらないと買ってもらえない。『伝える』とは何だろうと考え続けた人生だった」と振り返った一と記事にはあった。

さすが高田さん、と思った。佐世保市の本社をお訪ねするに際して、高田さんの魅力の一つとして本社を東京とかの大都市に移転させないことを聞かされていた。創業地を大切にしたいという高田さんの思いがあるのだという。以来ずっと、高田さんという人物像は心の中に居続けていた。なんでかな？、なんて思ったりしていたのだが、この記事のおかげで答えに思い至った。高田さんが周囲にご自身を伝えていく、その伝えるということが、ぼくにも伝わったからだと思った。

「伝える」ということは大切なことだが、難しい。「山」を伝えて行くことが天命だと思っているが、伝わらない。山岳遭難事故は年々増加する一方だ。「山の危険」はすぐそこにあるのに、山の危険が伝わらない。

スポーツクライミングが日々勢いを増している。オリンピックの種目に選ばれそうということで、熱い視線を集めている。トレイルランもいまや大ブームである。スポーツクライミングといいトレイルランといい、目立つ。絵になり易い種目である。スポーツクライミングとはなにか、トレイルランとはなにか、説明する言葉も不要、視覚的に見せるだけで伝わっていく。

しかし、山登りとはなにか、ということは見せるだけでは伝わらない。山岳展望の素晴らしさは視覚的に伝えられる。秘湯の露天風呂にドブンと浸る気持ち良さは視覚的に伝えられるが、それは付随する楽しみであって、「山」ではない。雨に遭遇したら展望など望むべくもない。雨の露天風呂の映像ではうらやむ人もいないだろう。山は見せるだけでは、伝わっていくものではない。

「山は人生の道場だ」とは、昭和山岳会の先輩から教えられた言葉だ。いまどきちょっと古いかなとは思うのだが、「山」を伝えられる数少ない言葉の一つかな、と思ったりする。

「山が分かってない」などと、先輩からやり込められたことがあったりしたが、見ただけでは分からない山を分かろうとするには、考えなくてはいけないのではないか。「山ってなんだろう」と考え続けること。考え続けることを伝えられたら、山の事故が減るかもしれない。ぼくにとって、山は素晴らしい人生の道場だった。